2023年4月16日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「信仰」がやって来た！

［ローマの信徒への手紙1章1～17節］

キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、――この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。――神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださることですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

1. 「福音」―御子に関すること

今日から新約聖書「ローマの信徒への手紙」を、飛び飛びではありますけれども、「聖書教育」誌に則ってご一緒に味わって行きたいと思います。パウロの手紙の中でも最大最高の書物だと言われています。とても深い神学が語れていると言われますが、基本的には、生まれて間もないローマの教会（集会）に対する信仰の励ましに満ちた、パウロの息遣いが聞こえてくるような書物だと言えると思います。素晴らしい言葉がこの手紙全体の中に沢山ありますよね。

今日の箇所でまず彼は「神の福音」（1節）という言葉を使っています。「福音」。これは普通の生活の中ではあまり使わない言葉だと思いますが、その意味は、「良い知らせ」「喜びの報告」、英語では「Good News」とか「Gospel」ですね。「Gospel」というのはよく使われるようになりました。パウロは、自分はこの「福音」のために選び出され生きているのだ、と言います。彼はこの「福音」の中にこそ自分が生きていることの意味を見出し、喜んでいます。その喜びが溢れ出ている手紙ですね。ではその「福音」とは何なのか。パウロはズバリ言います。「これは、御子に関するものです」（3節）と。彼が何を喜んでいるかというと、御子イエス・キリストという方がこの自分と出会って下さった！ということを本当に喜び、そのことは信仰が与えられたあなた方のことでもあるでしょう？と、まだ会ったことはないけれども、ローマに出来た教会を形作っているあなたがたと分かち合いたいのだ、とまず語っています。ローマですから、そこにはユダヤ人だけでない、むしろ異邦人も沢山いました。そのこともまたパウロの信仰に確信を与えたのだと思います。どういう確信かと言うと16節の中でこう語っています。「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」―「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」。身分、環境、国籍、性別、そのようなものを全く超えて、神様は、主イエスを受け入れる者に救いを与えて下さるのだ、という確信です。

[2]　十字架こそが救いだ――聖霊によって

しかし、その「イエスを受け入れる」ということ、「信じる」ということは、案外難しいことのようにも思います。福音というのはシンプルなのです。或る意味、愚かなことに思えるほどに。私たちも信仰を持てていなかった時があったと思います。その時、どうでしたか。「信じる」ということは、何か自分の頭で考えることを放棄すること、主体性をなくすこと、自分で自分が保てないような弱い人間の生き方のように思うことはなかったでしょうか？或いは信仰を持っても、そのように弱い人間であるように思われるのが嫌で、自分の信仰を隠していたということはなかったでしょうか？私はその気持ち、よく分かります。私は大学生の時に教会で信仰に導かれましたが、「証ししましょう」と言われるのが嫌いでした。私は話すことに自信がない人でしたから、それは出来ないと思ってしまうのです。そして今日のパウロのこの言葉も結構プレッシャーに聞こえてしまっていました。16節前半「わたしは福音を恥としない」。＝「証しすることを恥とするなよ」と言われているかのように思ってしまいます。けれども、パウロが「わたしは福音を恥としない」と言っているということは、彼は、福音つまりイエス・キリストを信じることを恥ずかしいと思っていたことがあった訳です。事実、彼は教養あるユダヤ人として、クリスチャンたちをバカな奴らとさげすみ、率先して迫害していたのですから。ですからその変わりっぷりというのは当時の世界では話題の中心だったと思います。さしずめ現代でしたら、「パウロ、おかしくなったか」とか「鮮やかな裏切り者」とか“炎上”するようなことだったと思います。しかし、パウロはそれまで恥ずかしいと思っていた十字架を、「恥」とは思わない、むしろこれこそが救いだ、と捉えるようになったのです。自分の力で変わっていったのでしょうか？そうではありません。神様の力です。そして、このことは私たちも全く同じではないでしょうか。そして今彼は、自分は直接関与してはいないけれども、聖霊によって、当時の世界の中心とも言えるローマに教会が出来ているというニュースを聞き、11～12節でこう語っています。「あなたがたにぜひ会いたいのは、“霊”の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです。」当時、電話もネットも勿論ありません。距離も遠い。でも直接会って、神様が生きておられることを分ち合い、励まし合おうと言っているのです。私は「教会」がなすべきことは、あぁ、分ち合いなのだなあと本当に思いました。特にクリスチャンが少なかったり、或いは様々な試練の時代の中で、共に祈り合い、主に結ばれているということの意味を探っていくということがどれだけ励ましになることでしょうか。この世界にクリスチャンは少ないかも知れません（特に日本では）。しかし、私たちは今こうやってイエス様を信じ、愛し、礼拝をしている。これは神様の奇跡です。小さいことではありません。

[3] ‟大きなもの”に捕われて走る

私は、パウロが「わたしは福音を恥とはしない」と言った時、彼はすパウロに言わしめた‟大きなもの”に捕われていたのだと思います。彼は使徒言行録にあるステファノが迫害を受けて死んでいく時、彼の「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」（使徒7:60）という祈りの言葉に胸がかきむしられ、それが後の大転換につながっていきました。「信仰」が彼に中に産声を上げたのです。ステファノを迫害したそのことがパウロの中に信仰が生れることに繋がったのです。正に聖霊のお働きです。私たちに与えられている今の信仰も、自分で気が付かなくても誰かに届いています。神様が神様の仕方で用いて下さいます。ですから「証ししなくちゃ」なんて肩肘張る必要も実はないのですね。何よりも「祈り」が大事なのではないでしょうか。「信仰」というのは、本当に神様からの賜物なのです。

　この度一つ思い起こした小説があります。『走れ、メロス』という太宰治の短編です。羊飼いのメロスは暴君である王ディオニスを殺しかけて取り押さえられ、処刑を受けることになった。しかし彼は、三日間だけ猶予が欲しい、妹の結婚式を開き、三日目の日没までには必ず戻って来るので、セリヌンティウスという無二の親友を身代わりに預けると言います。王は、そうかと言います。メロスとセリヌンティウスは二年ぶりに会い、そして約束を交わします。メロスは十里の路を急いで妹の結婚式を何とか行い、さあ帰ろうとするのですが、思わぬ川の氾濫とか、山賊に襲われたりとかで疲れ切ってしまい、このままだととても間に合わない。王が人質のセリヌンティウスにせせら笑い、人間などこんなものだと言うと、彼は「メロスは絶対来ます」と疑いません。メロスは最後の力を振り絞って走ります。友を助け、自分が死ぬために走ります。文章を引用します。「日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言って居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。走れ！メロス。」またこんな文もあります。「信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ。」…この後二人は再会し、抱き合います。それを見た暴君は心震え、「おまえらは、わしの心に勝ったのだ」と言うのです。

…これは、友情の物語でもありますが、‟誰が”信じているかという信仰の物語でもあると思いました。メロスは途中で挫折するのです。しかし再び立ち上がる。それは、底抜けの信頼が自分に注がれているということに気付いたからです。自分は信じられている！セリヌンティウスはまるでキリストのようです。このような桁外れの愛があることを私たちはイエス様に出会うまでは知りませんでした。1:17に「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」と書かれていますが、以前の訳では「信仰から信仰に至らせる」となっていました。「信仰」とは「信実」とも訳せる言葉です。おかしな言い方かもしれませんが、神様の、私たちに対するバカのような愛と赦し、信実が、私たちの中に「信仰」を生じさせます。「正しい人は信仰によって生きる」とあります。「正しい人」とは「神様に義とされた人・赦された人」です。私たちが出来ることは、私たちを愛し抜いて下さるこの方への信仰の従順です。「アーメン」と言うことです。どうか、与えられた信仰を無駄にすることがないよう、互いに励まし合いましょう。いつ主が再び来られても良いように。お祈りします。

主イエス・キリストの父なる神様、感謝します。こんな不信実で不信仰な私たちですのに、あなたは私たちの中に「信仰」を与えて下さいます。「福音」は正に宝物です。そして私たちの存在を通して、またこの礼拝を通しても、主イエスにある喜びがこの世界に、周りの者たちに伝わってゆくことが出来ますように、聖霊が導いて下さい。イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。